

2 松尾・山西遺跡(第3次)

調査地 加東郡社町松尾地内
調査期間 2000年12月 4日から
2001年 2月 5日まで
原因 公共下水道管埋設工事
原因者 加東郡社町 担当課一下水道課
調査協力 重機提供一(株)フットワーク建設
調査面積 約250m²



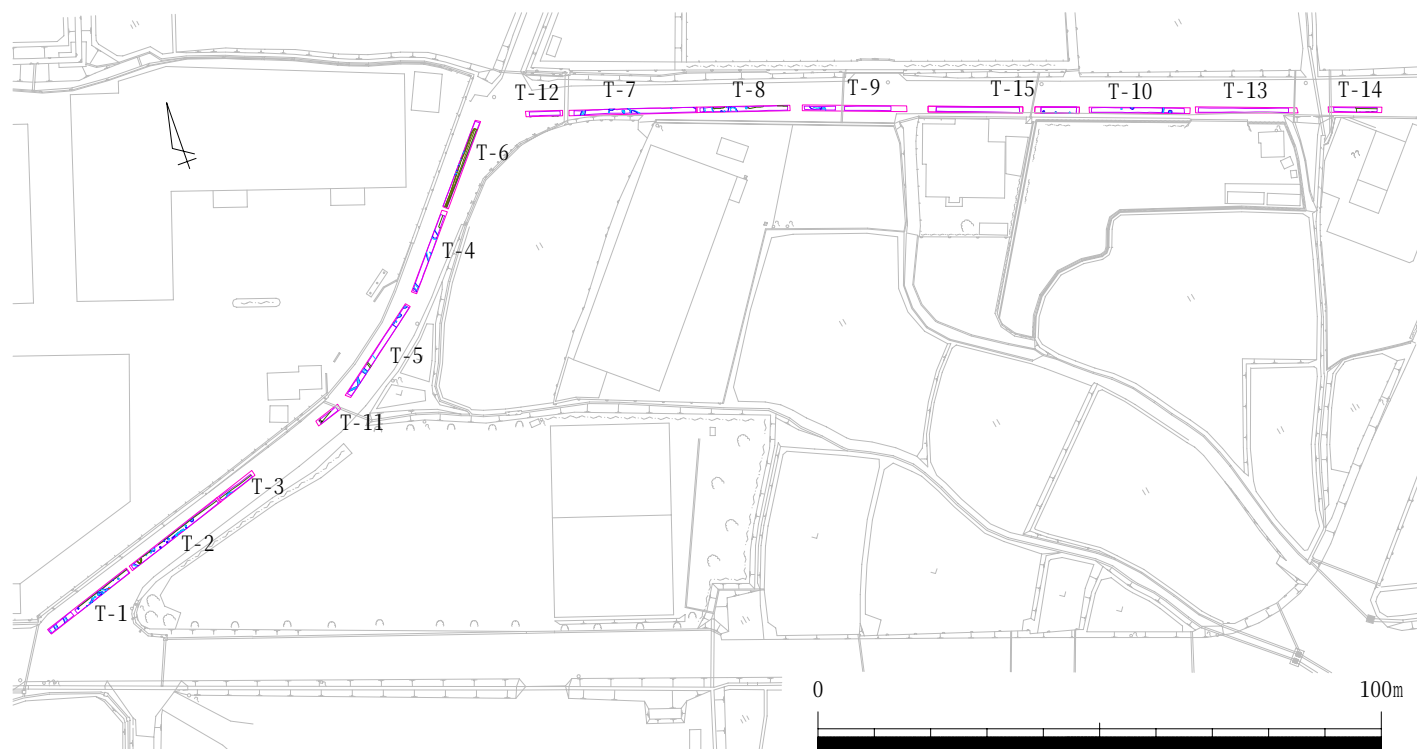
位置図

はじめに

松尾・山西遺跡は、弥生時代中期中葉に初源をみる遺跡で、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代の集落であることが従来の調査によって明らかになっている。ただ、その規模等については判然としない部分もあるところから、工事に先行して遺跡の有無・遺存状況を確認することにした。

調査の概要

調査は下水道工事により埋管される部分のみを対象とするところから、工事サイドがアスファルトをカッターで切った後に実施した。ただ、人工部分や排水路等の横断管部分や攪乱が著しい地点については調査の対象から除外している。



トレンチ設定図

遺構が検出されたのはT-1～T-10付近までで、東に近づくに従い遺構密度は減少する。弥生時代中期の土坑・溝、古墳時代の土坑・溝・ピット、奈良時代のピット、室町時代の溝・ピットなどが確認されているが、調査幅が狭いところから、これらの遺構の関係については言及することはできない。

T-1ではピット・溝3条が検出されている。SD-01は幅170cm、深さ24cmを測り、N-32°-Wに延びる溝で、中期の壺(1)・後期の甕(3)・高坏(4)などが出土しており、弥生時代後期の所産である。SD-02は、幅60cm、深さ24cmで、N-11°-Wを軸として延びている。出土遺物として

高坏・甕などがみられ、古墳時代の所産と考えている。SD-03は、幅50cm、深さ11cmを測り、N-7°-Wを軸として延びている。ピットからは少量の土器が出土するものの、時期を決定しうるものは出土していない。

T-2では、土坑・ピット・溝状遺構がみられる。溝状遺構は幅8cm、深さ4cm程度で北西に延びてきたものがほぼ直角に折れ曲がり、南西方向に約2.5mあまり延びており、遺存状態が悪いものの竪穴住居址の周溝である可能性が考えられる。

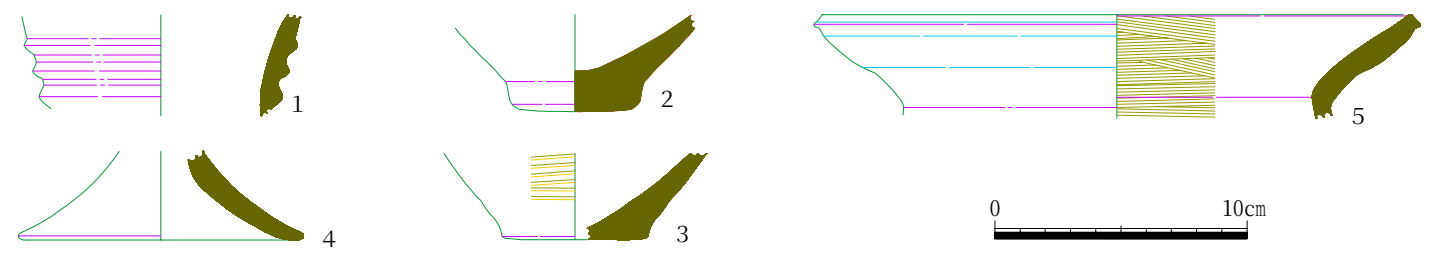
T-3で検出された円形状の土坑SK-01は深さ4cmを測るもので、調査対象地内の遺構検出状態から推定すれば直径1.9m程度の円形になる。出土遺物には、奈良時代以降の所産と考えられる須恵器の甕、土師器の甕・高坏などがみられる。

T-4のSD-01は幅80cm、深さ20cm、N-21°-Wを軸として延び、埋土は黒褐色(10YR2/2)土で、5世紀末頃と思われる須恵器の坏蓋が出土している。

T-5では東西に延びた幅25cm、深さ20cmの溝SD-01が直角に北方向に折れ曲がって延びている。SD-02は幅70cm、深さ15cmでN-34°-Wを軸として延びる溝である。7世紀初頭前後の所産であろう須恵器の坏蓋が出土している。

T-8～9にかけては落ち込み(自然地形?)がみられ、須恵器の甕などが出土している。
T-10では溝・土坑・ピットが検出されている。SK-01からは弥生後期の甕が出土している。この土坑を東限として、弥生時代～奈良・平安時代に至る遺構・遺物は検出されず、室町時代のものが散見するにとどまる。

出土遺物としては弥生時代の壺・甕・高坏、古墳時代の坏・甕・壺、奈良時代の坏などが、コンテナケース(厚さ6cm)でわずか1箱が出土したにとどまり、図化しえたものは5点のみである。



遺物実測図

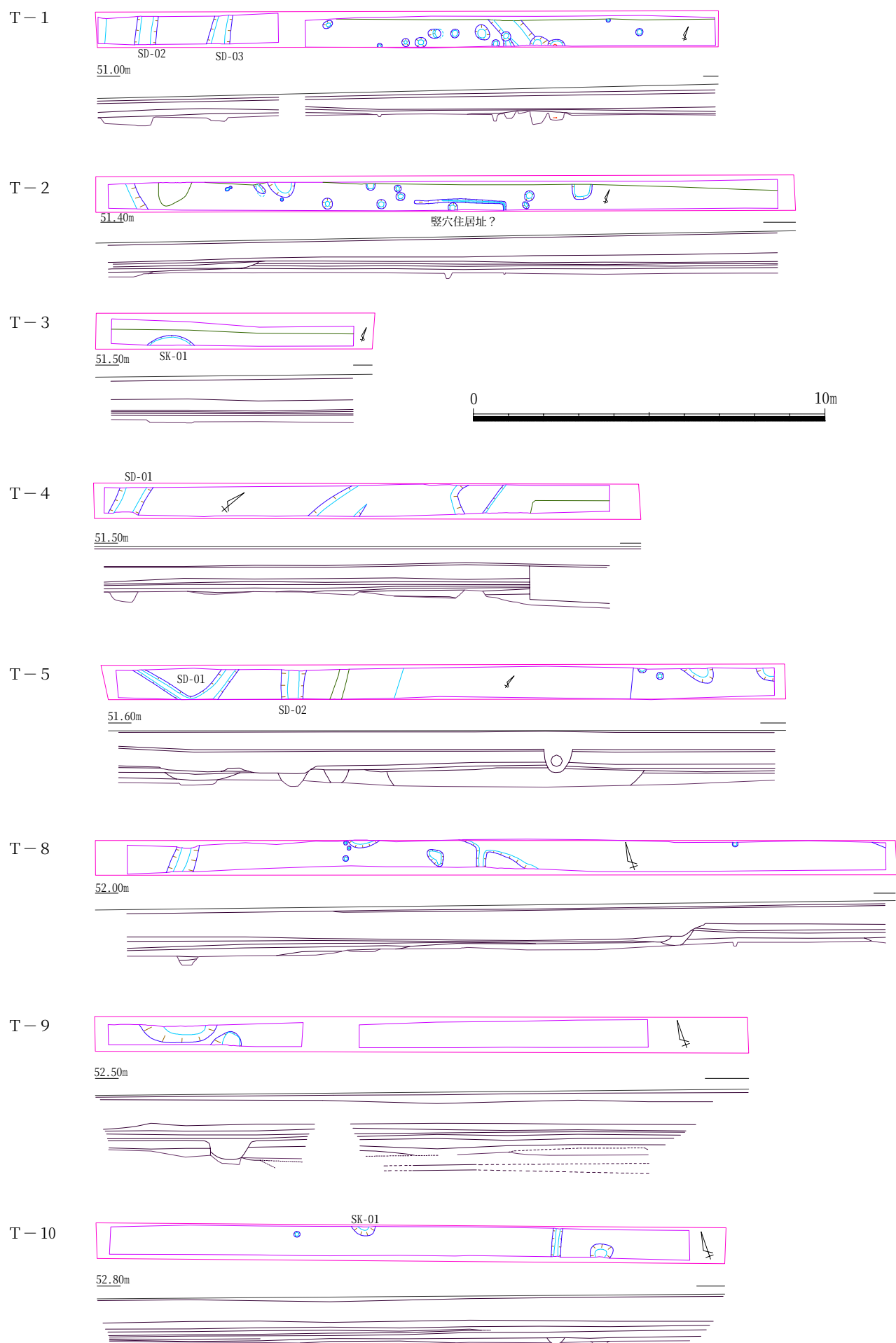
番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	底径	色調－外面		色調－内面		砂粒径	砂粒数	成形・調整	紋様
1	T-1 SD-01	弥生土器	壺	21.3	4		7.5YR8/3	浅黄橙色	10YR8/2	灰白色	1	4	外面－ナデ 内面－刷毛	貼付突帯3条
2	T-1 SD-01	弥生土器	底部		4.1	5.1	10YR8/2	灰白色	10YR8/3	浅黄橙色	1	5		
3	T-1 SD-01	弥生土器	底部		3.3	5.7	7.5YR7/4	にぶい橙色	10YR8/2	灰白色	1	4	外面－タタキ	
4	T-1 SD-01	弥生土器	脚部(高坏)		3.5	11.2	7.5YR8/4	浅黄橙色	7.5YR7/6	橙色	1.5	3		
5	T-1 P-2	土師器	甕	23.2	4		10YR8/3	浅黄橙色	7.5YR8/3	浅黄橙色	1	3	外面－ナデ 内面－刷毛	

器高の下線は推定値 単位 口径・器高・底径:cm 砂粒径:mm 砂粒数:個/cm²

遺物観察表

まとめ

この遺跡はかつて存在したカゴ池を含めて広がっていると考えられ、最大で東西450m、南北140mあまりの広がりを見込める。ただ遺跡の初源期である弥生時代または古墳時代・奈良時代では、南北は140mあまりと大差ないものの、東西はせいぜい200m程度であり、この遺跡が拡大するのは室町時代になってからのことであることが概ね確認されたことが、この調査の最大の収穫であったといえる。



トレンチ平面・断面図



T-1



T-1ピット



T-2



T-4



T-6



T-8 SK-01

